

第十話<故郷へ>

芸能界に見切りをつけた自分の前から、希望であったものの全てが姿を隠してしまったかのようでした。わたしは失墜の思いで、公務員を定年退職してシロアリの消毒会社を起こした父を手伝うために帰郷しました。

わたしが芸能界へ飛び込んだのはスタントマンになりたい、という夢を実現するためでしたが、当時日本には（今もどうかはしりませんが）わたしの考えているようなスタントマンという制度が何も確立しておらず、保険も保証もなかったため危険なことをしようとする「おまえがやると現場の迷惑になるから言われたことだけやってろ！」と怒鳴られました。

子供心に観た、ハリウッドのスター達を見えないところで支える真の立役者。それがわたしの抱くスタントマンの姿でした。わたしはその存在に強い憧れを重ねて見ておりました。

三歳の頃から、どもるようになったわたしは、人前で発表することがとても苦手で、しゃべろうとすればするほど言葉がのど元で膨らんだまま出てこなくなりました。しかしそれとは逆に運動に関しては、何をやっても負けないくらい得意で、みんなの前でお手本になることも度々ありました。

中学に進んだわたしは、小学六年生の時に書いた作文のように、オリンピックで金メダルをとる夢に向かって陸上部に入りました。ところが、その陸上部にとんでもなく足の速い男が出現したのです。彼はよその小学校から来たのですが、わたしは初めて同じ年の奴に胸一つの差ではありましたが敗北してしまいました。その事実をわたしは受け入れることができないままやむなく走り幅跳びに転向しました。

一方で彼は、走る度に市の記録を塗り替えてゆきました。

一番自信を持っていたもので味わった敗北感…この何ともたえようのない無力感その頃から自分の中に住みはじめました。

その時からわたしは、真に自分を輝かせてくれるものを追い求め始めました。

自分とは一体何なのだ！

その不安は、計り知れない勢いで自分を包み込んでゆきました。そしてわたしは、その不安を埋める憧れを異性に求め、恋愛の対象を創り出していったのかもしれませんが。

想っても、想っても届かぬ思い、願っても願っても叶わぬ出来事。その当時できた心の穴は人が成長していく中で、避けては行けない通り道かもしれないと思う。

わたしはその頃から心の内に込み上げる“ことば”を詩のような形に現し始めました。それはとても詩とよべるものではないかもしれませんが、自分の中に暴れる感情を、なだめすかしてくれるものでした。

わたしは、センチメンタルな思いにどんどん惹かれてゆきました。ミッシェル・ポルナレフやカーペンターズにそしてサイモンとガーファンクルに井上陽水に心を託してゆきました。

こうして、自分が何者であるのか解らない不安を抱え始める十三～十四歳の頃にぶつかる巨大な壁に、僕の知る同世代の仲間達も、目に見えない不安や希望の渦巻く中で自分の位置さえつかめない恐怖と隣り合う心の状態を味わっていたに違いありません。

それこそ、それはまるでわたしの演じた怪獣”H”のそのままの姿であったのかもしれない。